

海軍歷史

卷廿一卷廿二

八



★10012150★



D1
8

海軍歴史卷之二十一

横濱及横須賀製鐵所創設之中

目錄

佛國公使へ製鐵所起立方案ヲ諮詢ス

船廠創設ノ地ヲ相州横須賀ニ定ム

技師ウエルニ―來着

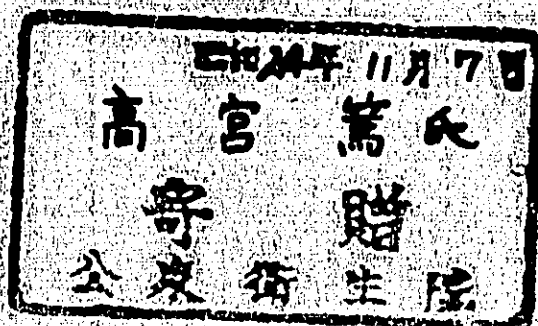
船廠創立ノ端緒

横濱横須賀二廠設置ノ方案

事務制限

佛人組織事項

邦官組織事項



外國品購入概畧

内國品購入概畧

船廠起立ノ結果

製鐵所約定書

首長服務條約書

横濱製鐵所ノ建築

器械製作方雇入ノ建白

柴田日向守ヲ佛國ニ派遣ス

佐賀藩献納器械

佛公使理事官歐行ノ心得十項ヲ呈ス

森林保育ノ意見

トロートル艦材貯蓄ノ勸告

海軍歴史卷之二十一

横濱及横須賀製鐵所創設之中

元治元甲子年勘定奉行小栗上野介及監察栗本瀬兵衛ヲシテ
佛國公使レオンロセスニ製鐵所起立方案ヲ諮詢セシム

瀬兵衛曩ニ函館ニ在テ邦語ヲ佛人メルメデカシユンニ授
ケ此時職事ヲ以テ横濱ニ在リカシユンモ亦公使館書記官
ニ擧ケラレテ横濱ニ在リ故ニ公見ノ餘屢々舊事ヲ叙テ、
終ニ公使ト相識ルニ至ル是ヲ以テ瀬兵衛ヲシテ該公使ニ
請テ横濱碇泊佛艦ノ工手ヲ備使シ以テ汽船翔鶴號ノ修理
ヲ管掌セシム瀬兵衛軍艦奉行木下謹吾ト共ニ工事ヲ督勵
シ六旬ニシテ成ル故ニ此命アリト云フ

是ニ於テ公使ロセス之ヲ横濱滞在ノ水師提督ジョーライ
ス以下諸氏ニ謀リ後チ反命シテ曰ク船廠起立ハ海軍興張
ノ基礎以テ輕忽其方案ヲ畫策ス可ラス故ニ今日先ツ施行
ス可キモノハ一ノ小工場ヲ横濱ニ起シ以テ目下艦船修理
ノ用ニ供シ併テ貴邦人民ヲシテ西式工業ヲ習知セシムル
ニ在リ貴邦果シテ此計畫ニ出テハ其事業ヲ統理セシムル
如キハ本港碇泊軍艦機關士シンソライ及ヒ士官ドロート
ルヲシテ其命ニ應セシムヘシ是レ水師提督ノ豫メ肯諾ス
ル所ナリ而シテ船廠起立ニ至テハ主任其人ヲ得テ百事之
ニ擔當セシメサル可ラス固ト外臣ロセスノ貴邦船廠ニ望
ム所ハ現今本港碇泊セミヲミ―ス號ノ如キ堅艦ヲ製造シ
出スニ在リ本艦ハ前日小栗氏ノ熟視スル所竣成之後茲ニ

八年未タ曾テ毀損セス是レ其主任技師セネデールノ伎倆
ニ長スルヲ以テナリ故ニ貴邦モ亦主任其人ヲ得テ之ニ委
托セサル可ラスツ―ロン船廠一等士官デリーセビスノ如
キハ其人ナリト雖モ本國政府ノ之ヲ肯セサルヤ知ルヘシ
二等士官某ハ學術最優外臣貴邦ノ爲メニ能ク之ヲ招致ス
ヘシ然ルニ曩ニ本國ノ命ヲ承ケ近ク清國上海ニ一作ル波ニ
在テ砲艦製造ニ從事スル海軍技師フランソア―ウエルニ
―ナルモノアリ今者其工ヲ竣ヘテ將サニ歸途ニ上ラント
ス其技能以テ船廠創立事業ヲ委托スルニ足ル故ニ外臣書
ヲ馳セテ私ニ其上途ヲ止ム貴邦果シテウエルニ―ヲ用ユ
ルニ意アラハ之ヲ上海ヨリ招致スヘシ且ツ貴邦ノ西式船
廠ヲ起スヤ抑モ創業ニ屬スルヲ以テ若シ任用其人ヲ得サ

ル如キアラハ濫費實ニ測ル可ラス外臣ロセスヲシテ之ヲ
幹旋セシメハ誓テ其弊ヲ受ケシム可ラス以テロセスカ少
壯ヨリ其名ヲ好ムヤ其利ヲ好ムニ過クルモノ有ルヲ徴セ
ヲレヨト是ニ於テ幕府議ヲ定メ船廠後地ヲ相州三浦郡及
横須賀村ニ定ム
工廠後チ地ヲ武州久良岐郡横濱本村
ニ定ム今ノ石川口製鐵所是ナリ創立事項ヲ舉テ一ニ
佛國公使ロセスノ幹旋ニ依ルヘキモノトシ老中水野和泉
守阿部豊後守諏訪因幡守ヲシテ奉書ヲ以テ其旨ヲ傳ヘシ
ム是ヲ横須賀船廠起立ノ濫觴トス實ニ元治元年十一月十
日ナリ

是ヨリ先佐嘉藩主鍋島齊正ハ蒸氣工作機械ヲ和蘭ヨリ購
入シ將サニ工場ヲ封内ニ起サントス然ルニ經費巨万ヲ要
スルト主任其人ナキヲ以テ竟ニ之ヲ幕府ニ献ス幕府之ヲ

受ケ工場ヲ江戸灣ニ起サント欲シ沿海ノ地ヲ檢シ相州三
浦郡長浦灣ヲ以テ其所トシ將サニ工場設立ニ着手セント
ス然ルニ幕府モ亦其人ナキヲ以テ竟ニ之ヲ果サス今者船
廠創立事項ヲ舉ケテ佛國公使ロセスヘ委托スルニ及ヒ十
一月十二日ロセス自カラ其地ヲ檢セント請フ幕府前段長
浦灣ノ之ニ適スルヲ慮リ二十六日小栗上野介栗本瀬兵衛
軍艦奉行木下謹吾及淺野伊賀守ヲシテ屬僚ヲ從ヘ公使ロ
セス水師提督ジョーライス其他佛艦セミヲミ―ス號艦長
士官ト共ニ我軍艦順動號ニ搭シ長浦ニ至リ其地勢ヲ點檢
セシム此日佛官自カラ投錘シテ測量スルニ灣内淺所アル
ヲ以テ更ニ隣灣横須賀ニ至リ之ヲ錘測ス本灣ハ灣形曲折
潮水稍々深ク且其地ノ形勝要害タル佛國ツ―ロン港ニ彷彿

佛スル所ノモノアリトシ終ニ横須賀ヲ以テ船廠設立ノ地ニ適スト爲ス十二月二日更ニ軍艦組長田清藏以下八名ヲ遣シ横須賀村水陸ヲ測量セシメ越ヘテ明年ニ涉リ屢々之ニ從事セシム

此前十一月廿九日長田清藏岡部鐵馬相州船越灣ノ測量ヲ被命同所へ出張ス

同年監察栗本瀬兵衛横濱港運上所へ出テ神奈川奉行早川庄次郎軍艦奉行木下謹吾同行佛國公使館へ到リ應接左之通り此程取調相賴候製鐵器械最早無程取調相濟鋪付手入之分モ夫々磨方出來荒方組立等モ相成大慶存候就テハ右器械ハ船越へ不相廻當所本村又ハ石炭庫最寄之内水利宜敷場所へ假据付被取計度旨被申聞候趣右ハ全其方見込之趣尙

又委敷承度存候

地所之義本村至極可然存候得共石炭庫最寄モ海邊出來滿潮之節傳馬船岸着致候得ハ都合宜敷御坐候尤右假据付トハ乍申其場所於テ直ニ細工へモ取懸候義故得と治定不致候而ハ御手戻可相成存候間今少く御待被下度存候其中ニハ上海表罷在候蒸氣家ベルジ―當港着可仕候ニ付同人見込モ承リ其上耽と申上候様可仕候翔鶴丸御船御修復所七ヶ所程ニテ可也手モ入可申且職方之者少く相休ミ候而モ手明キニモ不相成旁双方都合ニ相成申候左様御承知被下度存候假製鐵所之義ハ御取建相成否直ニ仕事爲致外國船等手輕之修理ハ引受仕事出來候様可申存候ニ付決而二重之御

失費ニハ相成不申候

左候ハ、地所廣狹及建物等巨細取調被示度存候其上此方
差支之有無共相糺シ其段申入候様可致存候

委細承知仕候何レニモベルシ——參着迄御待被下度且
右蒸氣機械之繪圖面御取寄拜見被仰付度相願候

慶應元乙丑年正月ウエルニ——ノ上海ニ——一ニ電報波ヨリ來着スル
ヲ以テ佛公使及我老中以下諸員ト船廠起立方案ヲ議定ス是
ニ因テ公使ハウエルニ——ヲシテ客歲以降此ニ至ルマテ其議
定セシ要旨ヲ逐次條記セシム通計八節後チ之ヲ橫須賀製鐵
所起立原案ト稱ス其撮譯左ノ如シ

第一節 船廠起立端緒

日本政府ハ船廠起立ニ先タチ至急施行ヲ要スルモノハ一
ノ工廠ヲ橫濱ニ設ケ現時所有ノ工作機械米國ヨリ購入セ
ヲ据附ケ以テ艦船修理ノ工ヲ起シ併セテ其邦人ヲシテ西
式工業ヲ習肄セシムルニ在リ是ニ因テ佛國海軍士官ヲ雇
入レ以テ其事業ヲ擔當セシム然レモ着實ナル邦官ヲシテ
之ヲ調理セシメサレハ其功ヲ奏スル能ハサルモノトス其
建築ハ今ヨリ一箇年内ニ竣工セシメ其經費ハ船廠起立費
ヨリ支出スルモノトス橫濱工廠設立細目ハ而シテ船廠起
立ニ至テハ縱使其規模ヲ狹少ニスルモ船渠二條船臺三基
ヲ設ケ佛人四十名邦人二千名ヲ使役セサル可カラス故ニ
之ニ適スル廳舍工場ヲ設クルニハ十八「エクタール」ノ平地
及若干ノ附屬地ヲ要ス而シテ其地タルヤ橫濱ヲ距ル南緯

十數里ポ―ハタン港トマルシ―岬ノ中間ナル横須賀灣ヲ以テ最良トス方今ノ測量國ニ據レハ北緯三十五度十七分零五秒東經(英國)緯威ヨリ起算スルモノ百三十九度五十灣口北ニ面シ大約三百メートル後チ灣口ノ山四秒トス員四百八十メートル灣内廣闊南ニ延ヒテ更ニ東折シ延長二千メートル水深六メートル乃至二十メートル方今ノ測量ニ據百十三万四千二百五十五メートル平方ニテ水深九メートル乃至二十三ノ一トル潮候時五時二十四分干満差二メートルトス丘山圍繞シ風濤恬然以テ船舶ヲ泊スルニ適シ且ツ其地質ノ粘土ナルニ因リ山ヲ毀チ海ヲ填メ船渠ヲ開キ工場ヲ設クルニ便ナリ而シテ其隣灣ニ界スル丘山三ヶ保連綿ヲ云フニ傍フテ延亘千メートルノ平地アリ茲ニ小流ヲ通シ新井ヲ開カハ船廠ヲ起スニ足ル其經費ハ二百四十万弗其建設ハ四ヶ年ヲ以テ竣工ヲ告クルヲ得ヘシ

第二節 工廠設立方法

本廠ハ第一節ニ畧述スル汽船修理ト工業傳習ノ二件ヲ以テ事業ノ主眼トシ而シテ其設立ノ地タルヤ横濱本村ヲ以テ之ニ適スルモノトス即チ該村山麓ヨリ海濱ニ通スル新道ニ傍フテ延亘百二十メートル幅員若干ノ地ヲ占據シ前岸石垣ヲ築キ周圍外壁ヲ選ラシ正門ヲ設ケテ其内ニ樓屋ヲ構造シ之ヲ官衙ニ充テ其傍ニ煉鐵鑄造模型旋盤鑄製罐製帆船具船工木工ノ各場ヲ設ケ其鐵工場ノ中央及後部ニ汽機ヲ据附ケ之ヨリ各個ノ製作機械ヘ運動力ヲ通スル爲メ場内ヘ方三十センチ角ノ梁柱ヲ架設シ之ニ車軸枕子ヲ螺旋釘ニテ固着シ而シテ該汽機ノ汽罐用ニ供スル爲メ新井ヲ開キ一時間毎ニ千リットルノ水量ヲ得セシメ又大

小數個ノ火爐ヲ置キ起風車ヲ設ケ風管廣サ三十センチナルモノヲ着ケ以テ風氣ヲ鼓送スルニ便ナラシム○本廠ハ西式工業ノ初起ニ係ルヲ以テ佛國海軍士官ノ力ニ籍ヲサル可ラス故ニ造船工事ニ通達スル士官一名ヲ擧テ首長ト爲シ機關手二名船工頭目一名ヲ置テ之ニ附屬セシメ其他工夫ハ佛國海軍各工廠及橫濱碇泊ノ軍艦ヨリ撰用スヘシ而シテ邦人ハ鐵工ニ木工ニ各々本邦固有ノ工業ニ熟達スルモノ百名ヲ選拔シ佛官之ニ西式工藝ヲ傳習シ甲熟セハ乙ニ傳ヘ乙熟セハ丙ニ傳ヘ相競テ其伎倆ヲ進マシメ以テ成業ヲ期スルモノトス○本廠ニ於テ使用スヘキ西式工具及其材料ハ本邦ニ缺乏ナルカ爲メ首長ハ需用ノ多寡ヲ計リ豫メ橫濱居留ノ外商ニ就テ購入シ之ヲ倉庫ニ儲蓄シ邦

官ヲシテ管理セシメ其需用アル毎ニ佛官證券ヲ以テ之ヲ請求スヘシ若シ濫用ノ疑アルハ邦官之ヲ首長ヘ申告スヘシ而シ邦官ハ專ヲ會計事務ヲ掌リ毎月各場ノ機械物品ヲ點檢シ佛官ハ專ヲ工業上ノ調査ヲ掌リ工夫ノ勤惰及事業ノ實況表ヲ作り之ヲ首長ヘ報告スルモノトス總テ艦船ノ修理及物品製造ニ當テハ先ツ首長ヘ告ケテ其指示ヲ受クヘシ若工業幅濫シテ其ノ索メニ應スル能ハス或ハ重大ノ工業ニ涉ルモノハ上等邦官ノ裁可ヲ受クヘシ以上叙述スル所ノ工事ヲ施スニハ緩急ヲ計リ順序ヲ逐テ終ニ完成セシムルヲ要ス故ニ其初メ工業未タ緒ニ就カサルニ當テハ艦船修理ニ要スル物品ノ如キモ或ハ内外商賈ニ命シテ製造セシメ之ヲ採テ整飾ヲ加ヘ一時其需用ニ充シムル

「アルヘシ而シテ我工場ノ準備漸ク整頓シ我工夫ノ伎倆
漸ク上進スルニ從ヒ順次重要ノ機械ヲ工作セシメ且ツ横
須賀船廠起立ノ日ニ至テハ其起立ニ關スル物品ヲ製造セ
シメ一々外國ノ輸入ヲ仰カスシテ其需用ヲ闕クニ至ラサ
ラシムヘシ是横須賀横濱ノ兩廠相俟テ用ヲ爲シ重複ヲ爲
サハル所以ナリ

第三節 船廠事務制限

アンジエニヨール官船廠首長ハ日本政府へ稟議スル有ル
ニ當リ若年寄酒井飛騨守以下船廠委員ニ就テ之ヲ具申ス
ヘシ而シテ政府ハ之ニ對シ指令ヲ下シ凡百ノ事項ヲ製定
スヘシ○首長ハ三ヶ月毎ニ工業ノ現況及經費ノ豫算ヲ具
申スヘシ而シテ工業及歲計ヲ區處スルハ首長ノ特權タル

ヘシ佛官會計長ハ邦官會計吏員ノ調製スル勘定書ト雖モ
總テ之ヲ檢閲シ該書へ署名シテ後チ實行スルモノトス且
ツ會計長ハ邦官倉庫吏員ト佛官副アンジエニヨールヨリ
物品購入ヲ提出スル時ハ其注文書ヲ調製シ首長ノ準可ヲ
經テ之ヲ外國商社へ命スルモノトス○會計ニ關スル簿書
ハ總テ邦語佛語ノ兩文ヲ以テ邦官佛官ノ各主任記載シ倉
庫品ニ關スル簿書ハ單ニ邦語ノミヲ以テ邦官主任記載ス
ヘシ而シテ工場ニ關スル簿書ハ佛官頭目ノ指示ヲ以テ邦
官見習頭目之ヲ記載スヘシ○以上統計ニ關スル事項ノ審
査ハ總テ會計長ノ負擔タルヘシ

第四節 佛人組織事項

船廠起立ニ當リ雇入ル可キ佛人ハアンジエニヨール官首

長一名 副アシエニヨール官機械部長一名 副アシエニヨール官建築部長一名 及會計長一名 以上三名ヲ三其他ハ左ノ如シ

職名	頭目	屬工
書記	一名	○
船工	一名	二名
填隙	○	一名
煉鉄	一名	三名 内一名整飾職業ノ者ヲ採用スヘシ
鑄造	一名	三名
製罐	一名	四名
旋盤	三名	八名 内一名摸型職業ノ者ヲ採用スヘシ
總鑿	一名	一名

運用 一名 一名
建築 一名 三名

合計十一名 二十六名 本年八月及十二月佛國派出ノ日
文雇佛人定員外ニ醫員及製圖
長舎密工ヲ増設スルモノトス

右人員ハ首長之ヲ佛國各工廠ヨリ撰拔シ其雇入期限ハ佛國出發ノ日或ハ佛國ニ在テ我船廠事務購入機械ヲ商社ヘ査スニ服スル日ヨリ四ケ年トス然レハ一ケ年經過ノ後ニ至リ彼我便宜ニ依テ解約スルヲ得ルモノトス
此場合ニ於テハ臨時代員ノ選舉ヲ要スルカ爲メ解約後尙ホ三ケ月間奉職スヘシ○各員雇入條約書ハ首長及其本質區長ノ立會ヲ請テ之ヲ調製シ佛國派遣ノ日本理事官ト取替ハスモノトス而シテ各員ハ横濱到着ノ日其膳本ヲ領事

ニ呈シ該定約上ニ就テ紛議ヲ生スルコアレハ其判決ヲ受クルモノトス○各員ノ來航ニ當リ三次官ハ佛國郵船ヲ以テ迎載シ頭目以下ハ帆船ヲ以テ註文機械ト共ニ同載スヘシ故ニ航海中ハ其俸給ヲ半減シ且ツ十名ヲ限リ妻子ヲ攜帶スルヲ許ス而シテ滿期解雇ノ者ハ其妻子ヲ併セテ歸國旅費ヲ給ス可シ但滿期前解雇ヲ請フモノニハ之ヲ給セス○病者ハ橫濱ナル佛國海軍病院ノ醫員ニ就テ治療ヲ請ヒ其患狀ノ輕重ニ據テ或ハ該病院へ送致シ又ハ郵船ヲ以テ歸國セシム可シ若シ其患狀ノ本人品行汚穢上ヨリ來ルモノハ俸給ヲ褫奪スルコアルヘシ且ツ妻子攜帶者ニシテ死去スルハ其妻子ノ所願ニ任セ郵船又ハ帆船ヲ以テ歸國セシム可シ本文病者ノ橫濱醫員ニ就テ治療ヲ請フノ不便ナルヲ以テ本年八月ニ至リ別ニ船廠醫員ヲ置

ク可キモ○各員橫須賀駐在中ハ其人員ニ應シ日本政府ヨリ家屋及什具ヲ貸附ス可シ然レモ其配賦ニ至テハ首長ノ處分スルモノトス○就業時限ハ一日西洋辰儀十時間タル可シ若シ緊急ノ工事アレハ此限ニアラス且ツ佛人ハ日曜ヲ以テ休業日ト爲スト雖モ我邦人ノ就業スルヲ以テ其傳習及監督トシテ總員三分ノ一ハ出勤スヘシ○頭目及屬工ハ我邦官直接ノ命令ヲ受クヘシト雖モ之ヲ首長へ報告シ其認可ヲ經ルニ非レハ執事セサルモノトス○佛工ノ我邦工ニ對シ鬭爭スルカ又ハ違式犯則ノ行爲アルハ首長ハ我邦官ト協議シテ所罰ス可シ若シ重科ニ涉リ或ハ贖金ヲ要スルモノハ橫濱駐在ノ領事ニ就キ條約書ニ據リテ其判決ヲ請フ可シ首長ノ權内ニ於テ專斷シ得ルモノハ五日減給

以下ノ懲罰ニ過ク可カラス○俸給ハ副アレンジエニヨール官一ヶ月洋銀四百弗頭目百五十弗屬工七十五弗ヲ以テ準度トス然レモ其業務ノ巧拙勉強ニ由テ二割ヲ増減スヘシ而シテ各員其本國ヲ發スル際確實ナル證券ヲ派出ノ日本理事官ヘ納ルモハ三ヶ月分ノ俸給ヲ前貸ス可シ然ルニ於テハ日本來航ノ後チ六ヶ月分ノ俸給半額ヲ扣除シテ之ヲ償却セシム可シ

第五節 邦官組織事項

船廠起立ニ當リ其主任タル可キ邦官ハ總監一名及會計部長一名倉庫部長一名工夫部長一名通譯部長一名トス而シテ主任ハ部下ニ書記及屬僚ヲ置キ分掌ノ事務ヲシテ澁滯セシメサルヲ要ス○邦官ハ工夫雇入ニ當リ彼カ我邦固有

ノ工式ヨリ成立チ以テ我船廠ノ西式工業ト乖戾スル所アルニ關セス務メテ其業務ノ相近キモノヨリ採用ス可シ例ヘハ木工ヲ造船工場ヘ鍛工ヲ煉鐵工場ヘ採用スル類ノ如シ而シテ其賃錢ノ多寡ハ邦官ノ制定スル所ニ從フモノトス然レモ其事業ノ熟達又ハ勉強ニ因テ他日副アレンジエニヨール官ヨリ供申スルモハ増給ス可シ此増給ハ原給ノ半額ヨリ超ルヲ得ス若シ或ハ其技能ノ拔群上達シテ之ヲ頭目ニ拔擢シ特別其俸給ヲ増加スル如キハ總テ首長ノ處分ニ因ルモノトス○邦官ハ工夫雇入ノモ務メテ其年期ヲ延長シ屢々新舊更替ノ弊ナカラシメ以テ工業ノ抄取リト經費ノ裨益ニ注意スヘシ○工夫業務ヲ執ルニ當リ一ニ副アレンジエニヨール官及頭目ノ指示ニ從ヒ以テ佛工ノ伎倆ヲ

見習フ可シ決シテ自己ノ意ヲ出シ又他人ノ指揮ヲ受ク可
カラス○工夫就業時限ハ前節ト同ク緊急ノ工事アルニ非
ルヨリハ一日西洋辰儀十時間ヲ以テ其定度トス但休業日
ハ我邦ノ習俗ニ從フ可シ○工夫就業中過失アルハ頭目
ノ報告ニ據テ邦官之ヲ懲罰ス可シ爲メニ之ヲ解雇スルニ
至テハ副アンシニヨール官ノ供申ニ依テ處分スルモノト
ス若シ佛工ノ邦工ヲ殴打スル如キヲアルハ邦官ノ通報
ニ據テ首長之ヲ所罰スヘシ○船廠警備トシテ戍衛ヲ四所
ニ設ケ衛卒四十八名ヲ置クヘシ其配置ハ首長ノ指示ニ據
ルモノトス○日本政府ハ他年邦人ヲシテ佛人ニ代リ船廠
業務ニ當ラシムル爲メ茲ニ學校ヲ興シ以テ技師頭目タル
ヘキ人材ヲ養成ス可シ故ニ少年士族ヲ撰拔シテ技師生徒

ヲ置キ通譯部長ヲシテ其授業ヲ掌リ佛語及工學諸科ヲ講
習セシム可シ尙ホ副アンシエニヨール官ハ本務ノ餘暇ヲ
以テ之ヲ教授スルモノトス而シテ別ニ佛官頭目ヲシテ少
年工夫ヲ撰拔セシメ之ヲ頭目生徒ト爲シ日々午前工場ニ
在テ各自ノ本業ヲ修メ午後學校ニ上リ圖學其他各科ヲ習
肄セシム可シ其學規ノ如キハ總テ佛國海軍ノ校則ニ模倣
スルモノトス

第六節 佛國品購入概畧

船廠起立ニ當リ佛國ヨリ購入ス可キ物品ハ即チ船廠建築
ト汽機工業トニ要スル機械其他現今内國ニ於テ得可カラ
サル鑛屬ニシテ本年日本理事官ヲ佛國ヘ派遣ノ日理事官
事由ハ載テ第該政府ヘ照會シテ買收ス可キモノトス○凡
八節ニアリ

テ購入品ハ先ツ經驗アルアシジエニヨール官ニ就テ其狀況ヲ熟知シ次テ各地ノ工場商社ヲ歴試シテ其品位價格ヲ調査シ然ル後注文條約書ヲ取替ス可シ而シテ注文品製造中及落成品受取ノキ今回雇入ノ頭目ヲシテ之ヲ點檢セシムヘシ○前項ノ物品買收ト注文品落成トニ從ヒ之ヲ日本ヘ輸出スルニ便ナル一港ニ輯集シ其取扱人ヲ命シ運送及海上保險ノヲ處分セシム可シ然レモ其運送ノ順序ニ至テハ首長之ヲ裁定ス可キモノトス即チ第一期ノ發船ニ於テハ船渠及工場築造ニ係ル物品ト該工業ニ關スル頭目屬工トヲ同載セシメ以テ横須賀到着ノ後チ工業上支障スル所アラシム可カラス

前項ノ物品購入運送ニ係ル經費ノ豫算概略左ノ如シ

金額	費目
佛貨 六十万フランク	汽機工業機械
全 二十万フランク	全上工業物品
全 四十万フランク	全木工業機械
全 十万フランク	蒸氣原機械
全 三十万フランク	工業用鑛屬
全 五十万フランク	運送費
全 十万フランク	旅費
合計佛貨二百二十万フランク	

我邦ノ外國ト通貨標準タル墨西哥銀貨ニ引直シ大略三十七万弗トス

第七節 内國品購入概略

船廠起立ニ當リ本邦ニ於テ購入ス可キ物品ハ即チ船廠建築ト艦船工業トニ要スル内國品ニシテ其價額及山地伐取

海岸埋立工費ノ如キハ總テ邦官其當否ヲ定メテ之ヲ支拂
フ可シ而シテ日本政府ハ該工業上成丈ケ内國品ヲ使用ス
ル爲メ本邦所産ノ物品ヲ鳩集シテ之ヲ佛官ヘ明示スヘシ
○前項物品ノ種類性質ニ就キ其産出地ニ於テ詳細之ヲ檢
査セントスルハ首長ノ見込ヲ以テ佛官ヲ派遣スヘシ此
場合ニ於テハ佛官ノ内地旅行ヲ許可シ敢テ障礙アラシム
可カラス○前項物品ノ價額原品代價及運賃ノ合算額ヲ云フ若シ輸入品ノ
價額ヨリ超過スルハ尙ホ邦官之ヲ覆審シ果シテ然ルニ
於テハ首長適意ニ外國品ヲ購入ス可シ

前項船廠建築ト山地伐取海岸埋立ノ工業ヲ起スニ當テ邦
官ハ首長ノ爲メ協力スルヲ懈ラサル可シ然レモ艦船及機
械ノ製造修理ニ至テハ總テ佛官ヘ委托スルモノトス

第八節 船廠起立結果

此原案前各節ニ掲クル事項ヲ結行シ果シテ起案者ノ主意
ヲ誤ル無ク終ニ完成ノ結果ヲ得ルニハ左ノ順序ニ據ル可
キモノトス○横濱工廠ハ力ヲ用ヒテ速ニ之ヲ建設シ以テ
艦船修理ノ用ニ供シ兼テ横須賀船廠築造ニ需用スル器具
ヲ製作セシム可シ其經費ハ工廠建設ニ於テ洋貨三万弗ヲ
要シ初起一ケ年間ノ工業材料買収及工夫賃額モ合算スルモニ於テ五万弗
ヲ要スルモノトス○横濱工廠建設中ニ當リ横須賀ニ於テ
ハ先ツ山地伐取海岸埋立ノ土工ヲ興シ次テ家屋及工場各
々二棟ヲ新設シ以テ吏員工夫ト機械物品ヲ容ル、所ト爲
ス可シ○邦官ヲシテ横須賀灣測量圖ヲ製セシメ兼テ船廠
建設ニ要スル各種ノ材料若干花崗石青石及ヒ石灰石千メ
トル立方火山灰三千メ

方ノ類ヲ購入スル準備ヲ爲ス可シ○前項ノ準備整頓セハ
日本理事官ヲ佛國へ派遣ス可シ是我船廠起立ニ關シ佛國
海軍各廠ノ技師工手ヲ雇入レ機械物品ヲ買收シ其他陸軍
傳習事項ヲ該政府へ照會スルカ爲ナリ而シテ其派出期限
ハ本年七八月我聞五月中旬ヨリ之間ニ在ル可シ該理事官
ノ馬里塞港へ至ルヤ此原案編製者ハ玆ニ之ヲ迎テ共ニ土
命船廠ニ赴キ其工業ノ狀況ヲ説明シテ我船廠創立ノ參考
ニ供シ次テ巴里府へ誘ヒ國書ヲ佛國政府ニ致シ以テ其使
命ヲ通スルノ手續ヲ爲スモノトス○日本理事官ハ前項使
命ヲ通スルニ當リ佛國政府へ左ノ三件ヲ照議シ其承諾ヲ
得テ之ヲ舉行スルモノトス但其舉行ノ手續タル該國海軍
士官ニ委托スルヲ要ス

第一我船廠起立原案ヲ佛國海軍ミニストルニ致シ其檢
閱ヲ請クル事

第二我船廠ノ首長タル可キ佛國海軍アンジエニヨール
官一名ヲ借受ル事

第三我船廠ノ首長タルアンジエニヨール官ハ佛國海軍
各船廠ノ技師工手ヲ選拔シテ我船廠へ雇入ル、ヲ
得ル事

日本理事官ハ佛國政府ヨリ前項ノ承諾ヲ得テ我船廠ノ首
長タル可キアンジエニヨール官一名ヲ擧ケテ之ヲ其所屬
ト爲シ百事ヲ幹旋セシメ居ヲ巴里ニ設ケ各地船廠ニ就テ
技師工手ヲ雇入ル、モノトス而シテ其雇入ノ順序タルヤ
先ツ副アンジエニヨール官機械部長建築部長各々一員ト

會計長一員トヲ撰擧シ直チニ之ヲシテ我船廠ニ係ル事務ヲ執リ并ニ註文機械ノ圖案ヲ製セシメ以テ各商社ニ向テ製造條約ヲ締結シ次テ我船廠建築ニ要スル機械物品ヲ買收シ該工業ニ關スル頭目工手ヲ雇入レ十月其一日ハ我ハルニ至リ之ヲ同載シテ第一期運送ノ帆船ヲ發ス可シ此時建築部長ハ蒸氣郵船ニ搭シ先キタチテ日本へ來航シ第一期船ノ來着ニ迫ヒ首トシテ工場建築船渠開鑿ニ着手シ次テ倉庫及佛人居住ノ官舎ヲ經營スヘシ○日本理事官一行ハ其事務ヲ結了シ概略千八百六十五年十二月其一日ハ我丑十月十四ヲ以テ佛國ヲ發ルヲ得可シ而シテ購入機械ノ日ニ當ル我慶應元年乙最後送附ス可キモノト雖モ千八百六十六年三月其一日ハ年丙寅正月十ヲ以テ悉皆佛國ヲ發出シ首長ハ千八百六十我慶應二五日ニ當ル

七年ノ歲首一月一日ハ我慶應二年丙寅十一月廿六日ニ當ルヨリ船廠建築工業ニ從事シ工場及船渠ノ落成ニ從ヒ造船工業ヲ起シ千八百六十九年其一月一日ハ我明治元年戊辰十一月十九日ニ當ルニ至リ大船渠ヲ落成シ各工場ヲ整理シ日本衆工ヲシテ各自其分業ヲ執ルニ堪ヘシメ茲ニ始テ横須賀船廠ノ完成ヲ告ケ以テ日本海軍ノ實用ヲシテ充分ナラシム可シ

前項船廠起立方案會議ノ際老中以下諸員ハ佛國公使及ウエルニ——ト大略其議目ヲ決了スルニ及ヒ公使曰ク貴國政府果シテ此議目ヲ可決セハ條約書ヲ得テ之ヲ本國政府へ送致シ即チ横須賀船廠ノ起立タルヤ固ニ日佛兩國親誼上ヨリ成立シ所以ヲ以テ表明ス可シ幸ヒニ水師提督シヨ

ライスノ本月廿七日我二月二日ヲ以テ歸途ニ就クノ好機ニ會
フ故ニ廿五日我正月三十日ヲ期シ該條約書ヲ得テ之ニ寄托ス可
シト是ニ於テ

同年正月廿九日製鐵所掛リ老中水野和泉守若年寄酒井飛驒
守連署ノ條約書ヲ公使へ授附ス其文如左

製鐵所約定書

今般橫須賀灣へ佛蘭西國ノ周旋ニ依テ製鐵所ヲ取建ル
ニ付公使へ商議セシ處上等器械官ウエルニ最モ其技
ニ長シタルヲ以テ薦揚セラレアドミラル厚情ヲ以テ
上海ヨリ右ウエルニ呼寄ラレ同意シタリ之ニ依テ
爾後ノ爲メ約スル所ノ條目左ノ通

一製鐵所一個所修船場大小二ヶ所造船場三ヶ所武器庫及役

人職人等ノ役所共ニ四ヶ年ニシテ落成ノ事

一橫須賀灣地形地中海岸土命灣ニ似タルニ依リ製鐵所ハ右
地方ニ取建アル模式ニ倣ヒ大概橫四百五十間豎二百間ノ
地坪ヲ以テ取立ル事

一製鐵修船造船ノ三局取建諸入用總計凡高一ヶ年六十萬ド
ルラル都合四ヶ年二百四十萬ドルラルニテ落成ノ事

但佛蘭西政府へ約定書相届候上ハ右ノ六十萬ドルラル
取揃置ヘク猶四ヶ年ノ間年々納方ドルラル差支不申様
可致事

右ハ兩國政府ノ允准ヲ經テ公使オイテハ其上等器械官ウ
エルニニ專任ヲ命セラレ我等オイテハ勘定奉行松平對
馬守軍艦奉行木下謹吾目付山口駿河守栗本瀬兵衛并淺野

伊賀守ニ專ラ其取扱ヲ命シ只願成功ヲ要スルモノナレハ
互ニ彼我内外ノ間隔ナク懇誼ヲ本トシテ取極ムルモノ也

元治二丑年正月廿九日

水野和泉守花押

酒井飛騨守花押

二月三日佛國公使ヨリ横須賀及横濱製鐵所首長ノ服務條約
書ヲ提出ス其文撮譯左之如シ

佛國海軍技師ウエルニハ横須賀製鐵所設立圖案ヲ製シ
公使及水師提督ノ檢閲ヲ經テ之ヲ日本政府ヘ呈シ而シテ
一旦佛國ヘ歸航シ其政府ヘ日本横須賀製鐵所首長タルノ
裁可ヲ請フ可シ既ニ其裁可ヲ得ハ日本理事官ノ佛國ヘ來
着ノ由ヨリ凡百ノ事項ヲ周旋シ以テ製鐵所起立原案ニ掲

クル首長ノ職事ヲ勤勉ス可シ該製鐵所ノ完成ニ至ルマテ
其職事ヲ執ルヤ固ヨリ日本官吏ト差異アル可カラス故ニ
佛國政府ノ俸給ヲ辭シ之ヲ日本政府ヨリ受クルモノトス
其給額ハ公使ノ裁定スル所ニ據リ年俸洋貨一万弗トス尙
ホ服務ノ狀ニ因リ増額スルコトアル可シ○今回一旦佛國ヘ
歸航シ前項ノ手續ヲ經テ首長ノ職ニ就キ而シテ該國ニ在
テ横須賀製鐵所ヘ備ヘ附ケ機械ヲ購入ノ爲メ各地ヘ往復
スル旅費ト後日再ヒ日本ヘ來航スル旅費トハ自己ノ俸給
ヲ以テ之ヲ支辨ス可シ他年解雇歸國ノ時モ亦然リ若シ日
本政府ヨリ之カ旅費ヲ給スル時ハ其俸額ヲ半減ス可シ故
ニ過般上海ヨリ來航セシ旅費ト今回佛國ヘ歸航スル旅費
トハ其就職以前ニ係ルヲ以テ別ニ合計洋貨千弗ヲ支給ス